

し、仏教的文学観の進展を吸収して成長し、他の仏教的文学観が衰微したあとも根強く残った。一面から言えば仏教的文学観の一つ、一面から言えば仏教的文学観の総合的到達点、後世から見れば仏教的文学観の余波ということになろう。

仏教論と歌論の両方の性格を持ち、歌論史の中に特異な位置を占める『野守鏡』は、全巻を通じて仏教と和歌の関連を、さまざまの説を立てて執拗に述べているが、それにもかかわらず、下巻の最初に、

すでに法楽のために、略頌の心をばかたはし申し侍りぬ

と記るし、仏教的文学観を成立せしめる多くの説とは別に、と言うよりも全体の根底に法楽の考えがあることを示している。つまり、多くの仏教的文学観、和歌即仏道論の中で、この法楽だけは、独立の説とは言い難いのである。それを裏書するように、中世を過ぎると、仏教的文学観は、その中に他の論を包括するような形で法楽だけになり、さらに近世になると、法楽も形式だけという結果になるのである。

昭和五十年度

特別研究生研究発表要旨

プラトン『テアイテトス』研究序説(二)

——知識と「真なる思い」——

寛 武

この序説は昨年度と同じ機会に発表した拙論「プラトン『テアイテトス』研究序説——知識と感覚——」に続くものであるから、この序説要旨も昨年度のもの（『大谷学報』第五十五巻第三号）を承けている。

さて知識は、感覚のうちに探究さるべきではなく、むしろ魂が有るものから自ら独りで掛かり合っているときに魂がもつところの「思い」のうちに探究さるべきである、とされた (T6a)。この思いを知識と同一視しようとするのが、事実上、テアイテトスの第二の知識説となる。すなわち、思いには真なるものと虚偽なるものがあるから知識は「真なる思い」(187b)だ、とテアイテトスは言うのである。しかしソクラテスは、「ひとが虚偽を思う」とは如何なる情態のことなのか、またそれは如何なる仕方であるか、如何なるかを言えずに行き詰っていると言う。かくしてソクラテスとテアイテトスとの対話は「真なる思い」の問題から、(それを知識とみなす以上)必然的に、「虚偽なる思い」の

可能性をめぐる問題へと移行されるのである。そしてこの問題に
関する長い考査のち結局、知識の何であるかを充分に把握する
前に「虚偽なる思い」を考察することは正しくなくまたこれを知
ることは不可能であることが明示されるのである。

では再び知識とは何であるか? 「知識は真なる思いである」と
いうのがテアイトスの答えであった。この説は法廷における裁
判の例証によって一応否定されるが、「言葉を伴って」それは知
識となると言われる。これがテアイトスの(彼自身ではなく
他人から聞いたものであるが)第三の知識説である。すなわち、
「ひとが何かについて言葉なしに真なる思いを把握した場合に
は、彼の魂はそれについて真理を射当ててはいるが知っているの
ではない。なぜなら言葉の受け答えのできない者はそのことに
ついて無知識なのだから。しかるに加うるに言葉を把握した者は、
それらすべてにおいて有能となり知識に関して完全な状態にあ
る」(202b-c)。では、ここで言われる「言葉」とは何を意味して
いるのか。次の三つの謂のうち何れかであろう。第一のものは、
「自己の思考を、音声を通して名詞と動詞を使って表明するこ
と。ちょうど鏡や水への如く、思いを口を通る流れへ刻み込ん
で」(206d)である。この場合、言葉は思いの単なる表明にすぎ
ず、正しいことを思うかぎりの人すべてが言葉を正しい思いと共に
持っている。第二のものは、「それぞれのものが何であるか問
われた人が、問うた人に諸要素を通じて答えを与え得ること」
(206e-207a)である。つまり、ひとがそれぞれのものを諸要素
を通じて極めつくすまでは知識して語っているのではないという

ことである。例えばある文字について私たちは正しい思いを持っ
ていても、それを構成している字・母を言うことができなければ、
私たちの持っているのはただ正しい思いにすぎない。これに
反してその字母を詳述することのできる人は、知識している人と
いうことになる。つまり真なる(正しい)思いに加えてこれを把
握しているからである。しかしながら、かかる意味での言葉を加
えて知識となるためには、その文字のあらゆる字母を「それ自体
として」(206a6)——たとえそれが時には或るものに、時には別
の或るものに属しているとしても——識別することができなけれ
ばならない(206a)。したがって、或るものの諸要素を正しく配
列する仕方を知っているからといって、ひとがそのものについて
真の意味で知識しているとはいえないのである(206e)。なぜな
らその同じ要素が他のものに属している場合に、誤まりを犯さな
いという保証はないからである。その第三のものは、「問われて
いるものが、よってもって他のすべてのものから相違するところ
の徴・表を言うことができること」(208c)である。すなわちそ
れぞれのものがそれによって他のものから相違するところのその
相違性を把握することを意味する。しかし真なる思いがかかる相
違性を伴って知識となるならば、その相違性を伴わない思いはた
だ何か共通なものに触れるにすぎないことになる。テアイトス
を人間であり鼻と口を有する者と考えることは、一般に人間を思
うことであって正しくテアイトスを思うことではない。正しく
テアイトスを思うためには、かれ独自の特徴を把握しなければ
ならないが、しかしそれは既に正しい思いによって把握されるも

のであろう。それゆえ、もし正しい思いに「言葉をつけ加える」とは、相違性を思うことではなく相違性を知ることだとすれば、知識とは何かと問われた者は、「相違性の知識を伴った正しい思い」(210a)と答えることになり、私たちは知識を求めて限りない循環に陥ってしまう。したがって以上の三様の言葉が真なる思いに伴っても知識の完全な定義とはなり得ないのである。

「したがって、知識は、感覚でもなければ、真なる思いでもなく、また真なる思いに伴って言葉がつけ加ったものでもないだろう」(210a-1)とソクラテスは言って、テアイテトスとの対話は結論なしに終わってしまう。しかし私たちは、知識の何であるかをこれまでの対話の中から何とか理解しなければならぬ。すなわちテアイテトスが気づかずまた引き出し得なかった答、ないしはそれへの暗示を読みとらなければならぬ。テアイテトスが答えた三つの知識説には確かにひとつの発展が見られるであろう。感覚より真なる思い、真なる思いよりは言葉を伴った真なる思い、というふうに次第に知識に近づいている、と考えられる。しかしそれらの答えは、いずれもテアイテトスの思いつき、或いは他人から聞いたものであって、テアイテトス自らの魂のうちで孕み、真に自分の子供として生んだものではなかった。しかるに、この、真の自己自らのものと言える知識、自己自身に最も親しい親らの知識、つまり、本当の知識、とは何であるかの暗示を、ソクラテスが「余談」として語った挿話のうちに、私たちは読みとることができると思う。すなわち、

「悪しきものが減ぶということはあり得ないことです、テオ

ドロス、——というのも善きものには常に反対のものがあるのが必然ですから——、またそれらが神々のもとに座をしめるということもあり得ず、むしろそれらはこの死すべき自然と此の場所とを必然的にとり巻いているのです。それゆえ、できるだけ迅速やく此所から彼所へ逃避すべく努めなければなりません。で、逃避とはできるかぎり神に似ることなのです。そうして似るといふのは知慮をもって正しくかつ敬虔となることなのです。……神は断じて不正なものではなく、むしろ可能なかぎり最も正しいものなのです。そしてわたしたちのうちできるかぎり正しい者となったひと以上に神に似た者はいないのです。このことに人間の真の堪能も無能や臆病も関係しているのです。というのは、このことの知^{グノシス}が真の知恵と徳であり、このことの無^{イグノシス}知^{イグノシス}が明らかな無学と悪なのですから」(176a-c)。

付記 紙面の都合上、遺憾ながら虚偽論を割愛せざるをえなかった。

長門の「オンニヨウ(陰陽)」

木場 明志

ここに事例としてとりあげる長門(山口県)の「オンニヨウ」と称された人々は、筆者が陰陽師系宗教者の名称で括って考えている民間宗教者の一例であるが、史料採集と実地踏査によって史的な位置づけを試みることを意図する。